

研究者と患者の新しい関係

西川 伸一

西川 伸一

(にしかわしんいち)

理化学研究所神戸研究所
発生・再生科学総合研究
センター幹細胞研究グ
ループディレクター

1948年生まれ。1973年京都大学医学部卒業。1980年より基礎医学に進み、「幹細胞」について研究。1983年ドイツケルン大学遺伝学研究所留学。帰国後、熊本大学医学部教授、京都大学大学院医学研究科教授を歴任。2000年理化学研究所発生・再生総合科学研究センター副センター長、幹細胞研究グループを併任。2003年より現職。

* * *

若い研究者とともに幹細胞研究を進めるのと並行して、新しい日本の出島「神戸ポートアイランド」から日本の医療のあるべき姿について提案を続けている。なんでも楽しむ多趣味が趣味。

先端医療振興財団

2000年に神戸市・兵庫県等からの出資で設立された公益法人。ミッションは、元京都大学総長の井村裕夫理事長の唱える神戸医療産業都市構想。「医療機器の開発」「医薬品等の開発」「再生医療等の臨床応用」の3つの分野において、基礎研究を実用化につなぐための研究開発、臨床研究支援、実用化支援などをおこなっている。

私たち患者の願いは、何といても「病気が治る」ことです。しかし、現実にはそれがかなわないとき、私たちは何をすればよいのでしょうか。「病気が治る」を実現するために、どのような道筋をたどればよいのでしょうか。再生医学の最先端で研究をつづけていらっしゃる西川先生は、患者、研究者、医師、企業が同じ目的のもとにコミュニティを形成する必要性を提言しています。「自分の病気を治す」から「病気を克服する」という発想の転換とは・・・。

1. 先端医療が可能な社会とは

私はまだ現役の研究者で、どのようにして血液細胞が誕生してくるのが研究テーマです。しかし今回は、自分の研究内容をご紹介しますのではなく、幹細胞研究者の視点から社会とのかかわりについての考えをまとめることにしました。

私は理化学研究所で基礎医学の研究をするかたわら、神戸市の**先端医療振興財団**の研究所の運営に携わっています。この先端医療振興財団での活動は、「先端医療が可能な社会の条件」について深く考えること抜きには不可能です。神戸市は医療産業都市を標榜し、先端医療振興財団はその中核に位置づけられています。最初何もなかったポートアイランド南地区には、大小合わせて150の新しい企業が立地し、現在も着々と進展をつづけています。しかしこの発展ぶりを十分承知したうえで、内部の私から見ても「医療産業都市構想」「先端医療振興財団」というのは良くも悪くも言葉自体の印象が強く、スッと腑に落ちないものがあります。

「先端医療で金儲けをするつもりなのか?」「先端医療が企業の勝手におこなわれてよいのか?」さまざまな声が入ってきます。しかし、治らない病気がある以上、その治療のための先端医療が必要で、それを支える産業が必要なことは明らかです。ただ、医療といった人の生死にかかわる問題に、利潤や産業に関

する言葉が結合すると、急に違和感が生じるのは、私たちの文化のもつ特性と考えられます。とすると、「**先端医療が可能な社会**」について考えることは、私たち日本人の文化的特性を真剣に考えることにもつながるのではないのでしょうか。ここでは、この問題にチャレンジしてみようと思います。

2. 一つの例として

—ハンチントン病患者さんへの胎児中脳細胞移植を考える

マルク・ペシャンスキー博士 (Dr. Marc Peschanski) はフランスの神経内科医で、中絶胎児の中脳細胞移植による**ハンチントン病**治療の先駆者です。1980年代から臨床研究を始め10年以上の経験を積んだ後、今では全ヨーロッパ規模で、この治療が本当に有効かどうかを調べるための臨床試験(治験)を推し進めています。では日本において、フランスで進行中の治験と同じ治験をおこなうことが可能でしょうか。

同じような治験を日本でおこなうときにぶつかる困難について見てみましょう。まず、人工妊娠中絶胎児を使用するという点です。ヨーロッパのいくつかの国では、比較的自由に利用することが可能ですが、日本では自主規制下において、一種の禁止状態といってよいでしょう。したがって、同じ治験はできません。もちろん指針も法律もないため、現実には野放し状態ですが、少なくとも公的研究